

## *Longman Dictionary of Contemporary English* (4th ed.) における when 定義についての語用論的考察

中山 仁<sup>1)</sup>

### The Pragmatics of *When* Definition in *Longman Dictionary of Contemporary English* (4th ed.)

Hitoshi NAKAYAMA<sup>1)</sup>

*the discharge of the college's legal responsibilities*

6 *when* someone shoots a gun

#### I. when 定義とは

本論では EFL 辞書の 1 つである *Longman Dictionary of Contemporary English* (4th ed.) (以下, LDOCE4) の語義記述に利用される *when* 節に注目し, その使用の背景および語用論的意義について論じる。なお, ここでは時を表す副詞節である *when* 節による語句の定義を「*when* 定義」と呼ぶことにする。まず始めに, *when* 定義がどのように行われているのか実際に LDOCE4 に記載された実例を以下に示す。(1) は名詞 *discharge* の語義とその用例である (*when* のイタリックは筆者によるもの; 可算・不可算やレジスターなど, その他の情報については省略)。

#### (1) *discharge*

1 *when* you officially allow someone to leave somewhere, especially the hospital or their job in the army, navy etc:

*Nurses visit the mother and baby for two weeks after their discharge from the hospital.*

2 *when* gas, liquid, smoke etc is sent out, or the substance that is sent out:

*he discharge of toxic waste into the sea*

3 *when* a substance slowly comes out of a wound or part of your body, or the substance that comes out

4 electricity that is sent out by a piece of equipment, a storm etc

5 *when* someone performs a duty or pays a debt:

これらの例から分かる通り, *when* 定義では *when* 節が主節を伴わずに独立して用いられている点特徴的である。(1) では 6 つの語義のうち 5 つが *when* 定義によって記述されており, この記述方法が LDOCE4 において積極的に導入されていることが分かる。これは今回の改訂前には見られなかった傾向で, 筆者が目を通した限り, 名詞の語義記述にこの方法がしばしば用いられているようである。

ここで 1 つの疑問が生じる。それは, この *when* 節は副詞節なのか, 名詞節なのかという点である。言い換えれば, *when* 節は「…する時に」(at the time when…) と解釈すべきなのか, 「…する時 (場合) / …する時 (場合) のこと」(the time when / a situation in which…) と解釈すべきなのかということである。というのも, 対象となる語が名詞であるのにもかかわらず, その語義記述には副詞節の形がとられていて (つまり意味は副詞的になり), 意味上の不整合が成立してしまうと考えられるからである。もちろん, *when* 節を名詞的に解釈して「…する時のこと」とすれば自然に理解できる考えも確かに成り立つが, その場合「のこと」の部分の意味が一体どこから生じるのか, また, すべての事例で「のこと」という意味を当てはめてよいかどうかという点に関してはあいまいなのが実態である。したがって, *when* 節の適切な解釈のためには *when* 節の機能を正しく捉える必要がある。

このようなことは辞書の使用者 (特に EFL 学習者) 側としては一見さしたる問題ではないかもしれない。な

1) 福島県立医科大学看護学部総合科学部門外国語

Key words : *when*, *where*, definition, adverbial clauses, pragmatics, Relevance theory

キーワード : *when*, *where*, definition, 副詞節, 語用論, 関連性理論

受付日 : 2007. 10. 19 受理日 : 2008. 1. 7

ぜなら、例えば (1) の discharge で言えば、品詞が明示されていることに加えて、その用例や動詞の discharge の意味・用例から、語義の when 節が副詞節であろうが名詞節であろうが、多くの場合どのような意味の名詞であるかがほぼ理解できると思われるからである。LDOCE4 内のより簡単な例としては、pregnancy の語義を when a woman is pregnant としたり、protection の語義を when someone or something is protected としたりする場合などが挙げられる。しかし、この「概して理解に支障をきたさない」という性質によって when 定義の問題が見過ごされてしまっているのもまた事実であり、時にはこの種の定義に使用者側がある種の違和感を抱く場合もあるようである。

例えば、定義される語があまり馴染みのないもので、しかも関連する派生語や用例などが提示されていない（あるいはそれらの関連情報があまり役に立たない）場合、使用者は when 節による説明を適切に解釈してその語義を理解しなければならない。その際、やはり問題になるのが「when 節は副詞節か名詞節か」、あるいは「when 節を名詞節としてどこまで意味を拡大して解釈できるのか」ということである。一例として、(2) について考えてみる。

(2) myopia

1 when someone does not think about the future, especially about the possible results of a particular action

(2) は「先見の明がないこと」を意味する語についての定義である。この場合、when 節の文字通りの意味は「人が行動の結末について前もって考えない時に」のようになる。問題はこの文字通りの意味からどの程度まで意味を拡張すべきなのかということである。例えば、「人が行動の結末について前もって考えない時」、「人が行動の結末について前もって考えない時のこと」、「人が行動の結末について前もって考えない時に生じること／もの」など、解釈の可能性は様々である。さらには、時の意味が脱落した「人が行動の結末について前もって考えないこと」という解釈も可能であり、事実、この解釈が適切な解釈に最も近いと言えるだろう。ということは、when 節の意味をそこまで抽象化するような意味の拡張を (when の意味の希薄化が抽象化だと仮定しての話だが) 認めることは妥当なのであろうか。

さらに、when 節を名詞的に捉えても解釈に違和感を覚える場合がある。(3) の幫助自殺 (assisted suicide) の語義で考えてみる。

(3) when a doctor or someone else helps a person who is very ill to kill themselves in order to end their suffering

(3) の文字通りの意味は概略「医師が自殺を手助けする時に」であるが、これを上記のように意味を拡張して「医師が自殺を手助けする時のこと」とか「医師が自殺を手助けすること」としても適切ではない。そのような解釈では自殺者自身の行為や意思ではなく、医師の行為を指すことになってしまう。assisted suicide の意味は理解できるが語義記述に納得できないという印象が残るのである。

したがって、when 節を単独で用いる when 定義の解釈方法を明らかにすることは使用者側にとっても必要なことなのである。残念ながら、この when の解釈を辞書 (の when 欄の語義) に求めることはできない。なぜなら、筆者の知る限り、このように単独で使われる when 節の語義・語法については、当の LDOCE4 を含め、これまで辞書で扱われたことはないからである。もちろん、これは when 節の名詞的な用法についての記述がないという意味ではない。周知の通り、when 節には where 節と並んで自由関係副詞節としての用法がある。

(4) a. When the cherry blossoms come out is a lovely time of year.

cf. Where he is weakest is in his facts.

b. Sunday is when I am free.

cf. This is where I live. (安藤 2005)

自由関係副詞節の when 節の特徴はその先行詞として the time を想定していることである (when に含意されている、または、先行詞が省略されていると考える)。しかし、これまで見てきたような語義記述における when 節を (常に時を表す) 自由関係副詞節に単純に当てはめて考えることはできない。なぜなら、(2) の myopia で言えば、この語は時ではなく状態・能力などを表すからである。したがって、when 定義における when 節については別の視点から説明しなくてはならないことになる。

そこで、本論では when 定義における when 節を本来の「時を表す副詞節」と位置づけ、その解釈は意味論的な意味としてコード化されているのではなく、語用論的解釈によって理解されるものであるという立場をとる。これによって、when 定義によって表される実際の意味について無理なく説明されるだけでなく、その表現上の効果についても明らかにすることが期待できる。以下では、まず、この立場を支える最大の根拠となる「is when 定義文」の存在について論じ、これに基づいて辞書にお

ける when 定義が行なわれていることを示す。次に、when 定義の解釈プロセスについて、語用論的アプローチによる説明を展開する。最後に、when 定義の表現上の効果について論じ、LDOCE4においてこの記述方法が採用された語用論上の背景について説明を与えたい。

## II. when 節は名詞節か副詞節か—「is when 定義文」の存在

### 1. is when 定義文

前節の when 定義は辞書内の記述に関するものであったが、is when 定義文は、実際の話し言葉、書き言葉の中で用いられる文の一種を指して言う。すなわち、is when 定義文とは以下のように、定義される語句となる主語に「is + when 節」が後続する構文のことである。(5a) は話し言葉、(5b) は書き言葉からの例である。

- (5) a. By definition, a withdrawal *is when you pull your forces back not under pressure by the attacking forces. Retreat is when you're required to pull your forces back as required by action of the attacking forces.* (WordbanksOnline: npr0020, Daily transcripts from broadcasts of National Public Radio, Washington, USA)<sup>1</sup>
- b. Organ donation *is when a person, or their family, agrees to the removal of one or more of their organs, so that the organ can be transplanted into someone else.*  
([http://www.bbc.co.uk/health/donation/flashjourney\\_index2.shtml](http://www.bbc.co.uk/health/donation/flashjourney_index2.shtml))

また、この種の定義文には when のほかに where を用いたものも存在する。

- (6) “Medically assisted suicide *is where the patient is the one does the final act, such as swallowing a drug or turning on the gas, to cause his death,*” he said. “Euthanasia *is when the physician injects the lethal drug or turns off the machine.*” (Wordbanks Online: oznews0051, Issues of the Courier Mail and Sunday Mail, published by Queensland Newspapers Pty Ltd, Brisbane, Australia.)

(6) は、同一人物が類似する語句 (medically assisted suicide と euthanasia) をそれぞれ where 節と when 節を用いて説明しているところである。これを見る限り、定義という機能上 when と where は区別なく用いることが

できるようである。このため、本論ではこれらの文を is where 定義文の場合も含めて「is when 定義文」と呼ぶことにする。

上記の例を見ての通り、LDOCE4で採用された when 定義は、is when 定義文の when 節の部分を抜き出した形で記述されているものと考えてよいだろう (興味深いことに、(3) で見たように LDOCE4でも assisted suicide について when 節を用いた定義を行っている)。ということは、is when 定義文の適切な解釈方法が示されれば、LDOCE4における when 定義の解釈も正しく導くことができると言える。以下では is when 定義文の構文と意味の関係、および、語法上の特徴を検討した上で、その語用論的特徴について明らかにしてゆく。まず、この構文を自由関係副詞節と比較することによってその意味的特徴を考える。

### 2. is when 定義文の「不自然さ」

(7) は is when 定義文、(8) は自由関係副詞節を含む文である。

- (7) A dilemma *is when you don't know which way to turn.*  
(AHB Usage)
- (8) Sunday *is when I am free.* (= (4b))

両者の大きな違いの1つは、(8) のような自由関係副詞節を含む文では主語と when 節がいずれも「時」を表す表現であり、意味上の等式的関係が成立しているが、(7) のような is when 定義文ではそれが成立しないという点である。そのため、(7) では when 節が名詞節ではなく、時を表す副詞節と捉えられやすくなり、結果的に「dilemma とは、どっちつかずの時に…」のように文が完結していない印象を与えることになる。これを「改善」するために、(9a) のように when を a situation in which と書き換えたり、(9b) のように前半部分が when 節に対応する主節になるように書き換えたりする方法が提案されることもある。

- (9) a. A dilemma is a situation in which...  
b. You are in a dilemma when... (小西(編) 2006)

この意味的不整合に基づく不自然さのため、is when 定義文は多くの語法書において概ね「話し言葉の場合を除けば教養に欠ける、幼稚な文体」と否定的な評価を受けている (小西(編) 2006)。

ところが、実際にはコーパスを検索するなどによってこの評価に対する多くの判例を入手することができる。以下ではその具体例について見てゆく。

### 3. 書き言葉での実態

(10) はいずれも書き言葉から見出された例である。(10a)では「反応型広報活動」, (10b)では「動脈瘤」を定義している。

- (10) a. *Re-active public relations is when you respond after a situation has arisen or an event happened.* (BNC Online: S. Whiteaker, *A Career in Advertising and Public Relations*)
- b. *Aneurysm is where a blood vessel thins, stretches and becomes dilated with blood.* (WordbanksOnline: ukephem0158)

(10) や先の (5b) の「臓器移植」の例も合わせて考えると, *is when* 定義文は抽象的な概念や専門用語など, 一般にはあまり馴染みのない語句を説明するのにもしばしば用いられるようである。説明の内容から見ても, このような書き言葉で使用される *when* 定義文が教養に欠ける, 幼稚な文体と判断することはできない。

これまでの語法書の判断の多くは規範的な観点からなされていると考えられ, 上記のような例については軽視される傾向があるように思われる。しかし, *is when* 定義文について, より記述的な観点から説明を行った語法書もあり, 注目に値する。その1つが *Merriam-Webster's Dictionary of English Usage* で, そこでは話し言葉に限らず, 書き言葉でも予想以上に自由に使用されていることが指摘されている。同書では「最近の評者は定義文に関しては批判的であり, 実際書き言葉としては見つけにくい, 時として使用される」例として (11) を挙げている。

- (11) a. *Cop-out is when you duck an issue and refuse to face up to your thing* — Ruth Nathan, *Plain Dealer* (Cleveland, Ohio), 22 Dec. 1968
- b. *What is humor? Humor is when you laugh* — Earl Rovit, *American Scholar*, Spring 1967

さらに同書では, この表現についての評価の背景には歴史的な事実を考慮に入れる必要があると指摘している。すなわち,

- (12) a. 18世紀の間は *is when/where* 定義文をよく用いていた。
- b. 18~19世紀においては, 定義文に *is when* を使用するのには何ら問題はなく, むしろ効果的な表現であったと考えられる。

- c. しかし, それ以降は, 一部の肯定的な主張にもかかわらず, 文法家からは否定的な扱いを受ける。

(13) に見るように, 当時は文法家でさえ *is when* 定義文の使用に抵抗がなかったようである。

- (13) a. *A Solecism is when the rules of Syntax are transgressed* — Alexander Adam, *Latin and English Grammar*, 1772
- b. *A Proper Diphthong is where both the Vowels are sounded together; as oi in Voice* — A. Fischer, *Grammar*, 1753

特に重要なのは, *is when* 定義文が「効果的な表現」であったということである。(13)は定義される語句が抽象的な語句の定義に用いられているという点で(10)と同様である。つまり, このような比較的馴染みのない語句を一般の読者に向けて((13)の場合なら学習者に)分かり易く説明するには都合のよい表現手段であったと思われる。

上で見たように, *is when* 定義文の使用が控えられるようになった主たる原因は規範的な姿勢である。しかし, 実際の使用においては形式的な「正しさ」よりも表現効果が優先される事態が生じるのは十分にありうることで, *is when* 定義文が現在の書き言葉でしばしば見られるのも, この伝達上の効果が大きく影響しているものと思われる。

### 4. *is when* 定義文の解釈にかかわる問題

*is when* 定義文が比較的自然的な表現であることが確認できたので, 次に *is when* 定義文の適切な解釈について検討する。II.1で見たように, *is when* 定義文の *when* 節は副詞節のまま解釈される傾向にあるようである。しかし, *is when* 定義文の *when* 節をすべて副詞節と解釈されるとは限らない点に注意すべきである。なぜなら, 特定の時や場所について定義する際は名詞節と解釈して差し支えないからである。

- (14) *The determining time, as defined under s4(2), is when the product was supplied and not when it was manufactured.* (BNC Online: I. Davies, *Sale and supply of goods*)

したがって, *is when* 定義文の *when* 節は名詞的なものから副詞的なものまで幅のある振舞いをするものと考えるのが妥当であろう。<sup>2</sup>

when 節が名詞的な場合は通常自由関係副詞節と同様に解釈できるとして、副詞的な場合はどのように解釈するべきであろうか。

- (15) a. *A dilemma is when you don't know which way to turn.* (= (7))  
 b. *Stress is when pressure exceeds your ability to cope.*  
 (WordbanksOnline: bbc0017)

例えば (15a) は when 節を「どっちつかずの時に…」から意味を拡張して「どっちつかずの時のこと」とすれば解釈は可能である。ところが、(15b) の場合はそのような解釈が当てはまらない。stress は「プレッシャーに対処する能力を超える時のこと」ではなく、「プレッシャーに対処する能力を超える時に生じるもの」を指すからである。それなら、このような事例に対応するために when 節を「…する時に」から「…する時に生じるもの」へとコード化する意味論的解釈規則を仮定すればよいであろうか。答は否である。なぜなら、そのような考え方では捉えられない例がまだあるからである。(16) がその 1 例である。

- (16) *Frustration is when you can't find the car keys.*  
 (Wilson 1993: 464)

文字通りの意味「frustration とは車の鍵が見つからない時のことである／時に生じるものである」が話し手の伝達したい意味のすべてではない。これによって話し手が伝えたかったのは「frustration というのは、例えば車の鍵が見つからない時に起こる可能性の高い、満足されない心の状態である」ということである。

このように、副詞的な when 節を含む is when 定義文の適切な解釈を意味的なコード化によって説明するのには限界があることは明らかである。したがって、is when 定義文の解釈には、文字通りの意味と意図された意味との間を埋めるための、語用論的アプローチによって説明する方が妥当であると考えられる。

## 5. 語用論的解釈プロセス

is when 定義文の when 節に関してこれまで見てきた例に共通して言えることは、is when 定義文の when 節は定義される語句に直接答えを示すために用いられているのではなく、間接的な、答えにつながるヒントとなるような情報を提供するために機能しているということである。したがって、is when 定義文によって語句の意味を理解するための語用論的解釈プロセスは基本的に (17) のようなものと仮定できる。

- (17) 話し手 (書き手) は when 節を用いることによって、意図する意味の理解に到達するための適切なヒント (文脈情報) を聞き手 (読み手) に提供し、聞き手は when 節で示された文脈とその他の文脈情報 (経験・既存の知識など) から推論を働かせて、意図された意味にたどり着く。

もちろん、(14) のような特定の時を定義する場合は (17) の解釈プロセスを待つまでもなく理解されるので、(17) のようなプロセスは適用されない。(17) の仮定は、言い換えれば、話し手が聞き手に対して「主語で示された語句の意味は、when 節で示された状況とつながっています。まず、その状況を考えてください。そして、それとあなたの経験や常識、現在あなたが注意を払っている (と期待されている) 情報などを考え合わせてこの語句の意味を理解して下さい」という伝達上の意図を伝えているのである。(17) の解釈プロセスを考慮に入れば、例えば (16) の frustration の例も期待通りの話し手の意図を伝えることが可能となる。この考え方は、伝達に関わる関連性の原理 (communicative principle of relevance) (「発話 (およびその他の明示的刺激) は最適な関連性の見込み (presumption of optimal relevance) を生み出す」) にも沿ったものと言えるであろう (Sperber and Wilson 1986, 1995<sup>2</sup>)<sup>3</sup>。

さて、is when 定義文の適切な解釈が明らかになったいま、LDOCE4 の when 定義の解釈についても同様に正しく導くことができる。次節でそれを検証し、さらに、LDOCE の旧版 (LDOCE3) と比較することによって、when 定義が表現上有効であることも明らかにしたい。

## III. LDOCE4への応用

### 1. 検証

まず、(2) で挙げた myopia の語義で確認してみる。

#### (2) myopia

1 *when* someone does not think about the future, especially about the possible results of a particular action

この記述からは、「人が先のことを考えない場合」を想像し、それに当てはまる何らかの名詞を指しているのだと考えられる (辞書記述に付随する情報である品詞 (名詞であることの明示) も理解に貢献している)。その結果、人が先のことを考えない場合にその状態、すなわち、「人が先のことを考えないこと」を指して myopia と言うのだということが理解できる。次は (3) で挙げた

assisted suicide の語義である。

- (3) *when a doctor or someone else helps a person who is very ill to kill themselves in order to end their suffering*

先にも述べたように、(3) で表されているのは自殺という行為や意図ではなく、assisted suicide と関わりのある状況、すなわち、「医師などが深刻な病をかかえた人を手助けして自殺を助ける」状況である（この場合、suicide の意味は既知情報として読み手（学習者）の知識の中に含まれている可能性が高い、と書き手が考えていると見てよいだろう）。つまり、ここで書き手は when 節によって suicide そのものの説明に焦点を当てているのではなく assisted の意味を理解するための具体的な状況、および suicide の目的に焦点を当てることによって、assisted suicide とはどのような suicide であるのかを読み手に理解させようとしているものと理解することができる。その結果、これが「幫助自殺」であると理解するに至るわけである。次は他の語義を文脈情報として利用することが期待されている protection の第5義の記述である。

- (18) *when criminals threaten to damage your property or hurt you unless you pay them money*

この場合、「金を払わないと暴力団によって脅迫を受ける時に」という文字通りの意味だけに注目すると、その語義を「暴力団による脅迫行為」と受け取ってしまう可能性がある。しかし、when 節で表された状況をヒントと考え、それに加えて同じ protection の第4義までで共通する「保護」という概念などを考え合わせると、第5義も「保護」と関連のある語義であると推測できる。その結果、「そのような脅迫を受けない（脅迫から身を守る）こと」がその語義であると理解することができる。

このように、when 定義は (17) の語用論的解釈プロセスを考慮に入れることによって適切に解釈できることが分かった。この時点で予測される疑問を挙げるとすれば、「語義を明示しなくてはならないはずの辞書がなぜ間接的な情報を提示する手段を用いるのか」となるだろう。これは一言で言えば、その方がむしろ語義の理解に役立つから、ということになる。つまり、語義を直接明示する形を取ると分かりにくい記述になる場合があるのである。このことを旧版の LDOCE3 の語義記述と比較することによって確認する。

## 2. LDOCE3 との比較から分かる when 定義の効果

(2) の myopia について、LDOCE3 では次のような定義を行なっている (myopia 第1義)。

- (19) *inability to imagine what the results of your actions will be or how they will affect other people*

一見して、(19) は (2) に比較して複雑で堅い印象を与えると言えるだろう。特に抽象名詞の語義記述の場合、より一般的な抽象名詞（例えば ability, act, action, situation, state など）で言い換えると読み手側に具体的なイメージが沸きにくく、しかも長く複雑な名詞句構造を取るため、解釈にかかる負担（発話理解に必要とされる処理労力）が増大する傾向があると考えられる。これに対し、(2) では具体的で平易な語彙を用いて簡潔な節構造を取っているため、そのような負担は軽減されると予測される。次はほとんどの語義で when 定義を採用した (1) の discharge に関する比較である。それぞれの語義を対応可能な LDOCE3 の語義と比較してみる。

- (20) discharge

1 *when you officially allow someone to leave somewhere, especially the hospital or their job in the army, navy etc*

LDOCE3: *the action of allowing someone to go away, especially someone who has been ill in hospital or working in the army, navy etc.*

2 *when gas, liquid, smoke etc is sent out, or the substance that is sent out*

LDOCE3: *the act of sending out of gas, liquid, smoke etc, or the substance that is sent out*

5 *when someone performs a duty or pays a debt*

LDOCE3: *the act of doing a duty or paying a debt*

LDOCE3 における記述はいずれの語義も act または action を用いた記述を行なっているという点で、先に触れた抽象名詞を抽象名詞で言い換える記述と同じである。また、ここでは act と action が語義によって使い分けられているが、実際には両者に意味上の有意差があるとは思われないため (OALD7 では上記第1義が act で、第2義が action で記述されている)、使用者の理解に必要な以上の注意を払わせることになる（関連性理論の立場から言えば、act と action の使い分けがされた場合、読み手側はその使い分けにそれなりの意義があると意図されているものと受け取る可能性が高い。にもかかわらず、実際には有意差がなかったとなれば、読み手は記述の理

解のために余計な処理労力を使わされることになる(と言える)。さらに、第2義の act の使用自体にも問題がある。第2義は「鼻汁」などの体内からの分泌(物)を意味するものだが、act は基本的に「行為」を表すので、体内からの分泌といった無意識の「症状」について含めることが可能かは疑問である。一方、LDOCE4では(2)と同様に抽象名詞による言い換えが避けられ、簡潔な文で表現されている。また、第2義の分泌を表す語義についても、受動態が用いられているために「行為」と「症状」の意味を無理なく含めることができる。

#### IV. when 定義の語用論的意義—関連性理論の立場から

##### 1. 関連性への貢献

このように、抽象名詞の語義記述に名詞句を取る方法は、多くの場合抽象名詞を主要部とした複雑な構造を強いられ、その結果語義解釈の際に読み手により多くの処理労力 (processing effort) を負担させることになる。一方、when 定義による記述方法では、具体的で平易な語句および構文が使用されるため、読み手はより少ない処理労力で記述内容を理解し、(17)の語用論的解釈プロセスを通して意図された意味に到達できるのである。

Sperber and Wilson (1986, 1995<sup>2</sup>)によれば、発話の関連性は認知効果と処理労力によって決定される。基本的には、発話によって与えられた情報の認知効果が大きければ大きいほど関連性は高くなり、処理労力が多ければ多いほど関連性は低くなる。when 定義は少ない処理労力によって関連性に貢献するという点で意義のある記述方法であると言えるのである。<sup>4</sup>

##### 2. ルース・トークとしての when 定義

関連性理論では発話と思考との間に解釈的類似性 (interpretive resemblance) があり、その特徴の1つとして次のようなものがあるとしている (東森・吉村 2003: 107)。

- (21) 発話と思考はある程度類似したものであり、発話により表現された命題は話し手の内に持っている思考に完全に一致しているというよりも、両者は類似している (あるいはルースに用いられている) のが普通であり、このルース・トーク (loose talk) を関連性理論では意味理解の出発点と考える。

単純な例で言えば、月収を聞かれた場合の答えとして次の2つの発話を比較した場合、より厳密な (22a) で

答えるよりも、よりルースな (22b) を使う方が普通であり、処理労力も少なく済む。

(22) a. I earn £797.32 a month.

b. I earn £800 a month.

(Sperber and Wilson 1986, 1995<sup>2</sup>)

これに when 定義を当てはめて考えるならば、名詞の語義に対して表現された when 定義は記述者の伝達したい意図をルースに表すためのものであると行うことができまいだろうか。そうであれば、when 定義は意味上 (字義的に解釈すれば) 不自然に捉えられるが、言語伝達の観点から言えばごく自然な伝達手段の1つと見なすことができるであろう。

#### V. おわりに

LDOCE4による when 定義はある意味斬新な印象を与えるものと言えるが、*Merriam-Webster's Dictionary of English Usage* で言及されているように、通時的に見れば決して目新しいことではなく、過去の記述スタイルの復活と捉えることができる。これに対しては依然として否定的な立場もあるようではあるが、主要なEFL辞書の1つであるLDOCE4にこの記述が採用されたことによって、他の辞書の記述スタイルに今後どのような影響を及ぼすことになるか注目したい。一方で、when 節のこのような語法自体これまでの辞書に記述されることがなかったので、これに関する情報も何らかの形で辞書記述に盛り込む必要があるであろう。<sup>5</sup>また、語用論的観点からは、is when 定義文も含めて最適な関連性の見込みがどのように実現されるかをより詳細に検討する余地が残されているので、これについては今後の課題としたい。

#### 注

- 1 本論で使用された WordbanksOnline および BNC Online データは小学館コーパスネットワークの提供によるものである。
- 2 これに関するより詳細な議論については中山(2007)を参照。
- 3 最適な関連性の見込みとは以下の通り：
  - (a) 意図明示的刺激(発話)は少なくとも受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。
  - (b) 意図明示的刺激(発話)は伝達者(話し手)の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。
- 4 ここでは、あくまでも when 定義が英語母語話者にとって伝達効果の高い表現であると述べているのであって、こ

のことが外国語として意識的に英語を学習する者(非母語話者)の直感と整合するとは限らない点に注意する必要がある。たとえ、英語学習者側に依然としてこの表現に対する強い違和感が存在するとしても、それは学習者の学習経験に照らし合わせて when 定義の解釈(翻訳)に役立つ文法知識が該当しないということに過ぎない。本論で問題にしている「解釈」とは英語母語話者の無意識的な認知プロセスのことであり、それが非母語話者に備わっていないために直観にずれが生じるのは十分ありうることなのである。

- 5 場合によっては、when 節に関する語法情報というよりは、be 動詞に後続する副詞節の語法という、より一般的な視点からの記述が必要となるかもしれない。これについては、今後コピュラ文の機能に関する考察も対象に含めた広範な検討が必要と思われる。

#### 参 考 文 献

- The American Heritage Book of English Usage*. 1996. Houghton Mifflin, Boston.
- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』開拓社, 東京.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Verbal Communication*. Blackwell, Oxford.
- 東森 勲・吉村あきこ. 2003. 『関連性理論の新展開』研究社, 東京.
- 小西友七(編). 2006. 『現代英語語法辞典』三省堂, 東京.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 1995<sup>3</sup>, 2003<sup>4</sup>. Pearson Education Limited, Edinburgh Gate.
- Merriam-Webster's Dictionary of English Usage*. 1994. Merriam-Webster, Springfield, Mass.
- 中山 仁. 2007. 「補語位置に生じる副詞節の用法と解釈プロセス-定義などに用いられる when/where 節に関して-」『英語語法文法学会第15回大会予稿集』49-56.
- Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Sperber, D & D. Wilson. 1986, 1995<sup>2</sup>. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, Oxford.
- Wilson, D. 2004-05. *Pragmatic Theory* (PLIN M202).
- Wilson, K. G. 1993. *The Columbia Guide to Standard American English*. Columbia University Press, New York.